

## コレクション展

### 寄贈コレクションを最大限生かす

開設準備室時代から、ひとはくは多くの県民の方々から貴重なコレクションを寄贈頂いてきました。開館当初の主なコレクションには、博物館設立のきっかけとなった阪口コレクション(ノミ類など)や堀コレクション(神戸層群から産出する植物化石)などがあります。その後も、約30万点の美麗なチョウ類、甲虫類からなる江田コレクションや3500巣分の鳥卵標本が特色の小林コレクションなど、大型コレクションを寄贈して頂きました。開館10周年の2002年3月には寄贈者への感謝の気持ちを込めて、多くの寄贈資料を常設展示する「ナチュラリストの幻郷」を新設しました。開館20周年を迎えた2013年3月には新たな常設展示「魅せる収蔵庫」をオープンし、収蔵庫に眠る貴重な標本・資料を多くの来館者に目にして頂くとともに、新世紀の博物館資料の公開・活用手法を模索しました。

館蔵コレクションのいっそうの公開促進を試みたものが、2018年度「美しい蝶たちとの出会いー江田コレクション2018」から始まるコレクション展です。その後は2019年度「石ころズラリ～美しい鉱物から珍しい岩石まで～」



1.「美しい蝶たちとの出会いー江田コレクション2018」会場風景 2.「石ころズラリ～美しい鉱物から珍しい岩石まで～」珍しい鉱物 3.「頌栄短大植物標本コレクション～そんなに集めてどうするの～」日本列島のブナのさく葉標本 4.「ひとはくの鳥類標本をお見せします！」猛禽類

(岩石・鉱物標本)、2020年度「頌栄短大植物標本コレクション～そんなに集めてどうするの～」(維管束植物標本)、2021年度「ひとはくの鳥類標本をお見せします！」と続いてきました。コレクション展は20周年時の「魅せる収蔵庫」から、30周年時のコレクショナリウム開館へと至る道のりのひとつとしても大きな役割を果たしています。

## 標本のミカタ

### 研究員の解説で収蔵標本を間近に感じる

ひとはくには、開館以来収集してきた200万点以上の昆虫や動植物、岩石、化石などの自然史系の標本や古写真などの資料が収蔵されています。これらの標本には、学術的新発見の基盤となった標本、生物の過去の分布状況を証明するための標本、絶滅危惧種の分布状況の証拠となる標本など貴重なものが含まれています。また、よく似た種類を比較分類するためのセットとして、あるいは生物の形状の美しさ・面白さを伝える展示物として、収蔵標本が活用されています。しかし、博物館の収蔵標本のすべてを館内に展示することは物理的にも保存面でも難しいため、現状ではその多くが収蔵庫に保管されています。標本資料の収蔵は博物館機能の核心部分にも関わらず、この様相は気楽に見学してもらうことができませんでした。

そこで2018年度から、普段は見ることができない収蔵資料を、テーマにもとづいて蔵出しする日を定め、収蔵資料から進化や自然、地球の成り立ち、まちの景観形成などについて読み解き方を解説するオープンセミナー「標本のミ



1.資料を手に取ってみる来館者 2.近くでみられる魚の標本 3.展示されたチュウシンフワの葉の化石 4.植物のタネでできたキーホルダー

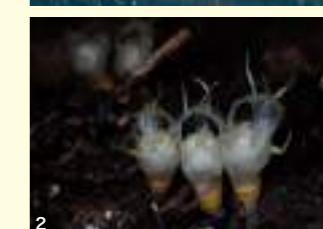
カタ」を始めました。普段は、展示室でガラス越しにしか見ることができない標本を、この企画では、実物を直接見られる状態で数多く陳列し、顕微鏡などの実験道具を使って、研究員が解説しています。また、関連のイベント・解説も同時に開催することで、標本が存在する意義を多様な観点からわかりやすく発信しています。

## コウベタヌキノショクダイの発見

### 約30年の時を経て、新種と同定

コウベタヌキノショクダイは、これまで神戸市内でただ1度、1個体だけ採集されたことがある植物です(図1)。1992年の採集後、ヒナノボンボリと仮同定され頌栄短期大学に保管されていましたが、2012年に他の標本とともにひとはくに寄贈されました。2017年、神戸大学の末次准教授がひとはくを訪れ、「神戸で採られたヒナノボンボリ標本は新種の可能性があるので、自分の研究室で解剖させてほしい」と申し出られました。遂巡したものの、これまでに何種もタヌキノショクダイ属で新種を発表されていた末次氏を信頼し標本をお貸しすることにしました。末次氏の研究の結果、やはりヒナノボンボリではなくタヌキノショクダイ属(図2)の未記載種であるとわかり、2018年にコウベタヌキノショクダイ(*Thismia kobensis* K.Suetsugu)という名前で新種発表されました(図3)。

なかなかドラマティックな展開ではありますが、実は標本庫で新種が見つかるることは珍しいことではありません。野外で「これは新種だ!」とわかって採集することの方が、むしろ稀なのです。新種記載の論文を片端から調べたところ、標本



1.コウベタヌキノショクダイ 2.近縁種のタヌキノショクダイ(写真提供:末次健司氏) 3.コウベタヌキノショクダイの解剖図

が採集されてから5年以内に論文発表された(=要は採集してすぐに新種だとわかった)のは16%、残りは標本採集から発表までに5年以上(うち25%は50年以上!)かかっていたという研究があるくらいです。コウベタヌキノショクダイも採集から26年後の新種記載です。ひとはくの収蔵庫には、他にもまだ将来新種になる標本が眠っている可能性が十分にあるのです。

## 毎月かわるよ！江田コレクション展

### 昆虫の多様性を目の前で感じる

2021年5月12日から2022年3月31日まで、ひとはくサロンの休憩コーナーで、ひとはく初の毎月入れ替え展示「毎月かわるよ！江田コレクション展～美麗な甲虫や蝶の標本を毎月入れ替え展示」を実施しました。年度始めの臨時休館などにより、スタートが5月にずれ込みましたが、全9回の展示を行い、展示された標本は、のべ268種1286点にもなります。展示エリアが休憩コーナーということもあり、学術的なことは一旦置いておき、まず昆虫の多様性を見た目で楽しんでもらうというコンセプトで、巨大な昆虫だけを集めたり、キラキラ、カラフルな昆虫だけを集めたり、分かりやすいテーマで標本を厳選しました(図1-3)。また、オンラインコンテンツとして、収蔵庫からの予告動画と展示標本の一部をひとはくのYoutubeチャンネル「Hitohaku Movie」にて公開し、コロナ禍において来館できない方向けのコンテンツも毎月更新していました(図4)。

この展示のベースとなっているのは、ひとはくの昆虫収蔵庫に収められた110万点を超える昆虫標本です。この多くは、県内外の昆虫愛好家の皆さんのが、研究や鑑賞を目的と



1.巨大な昆虫 2.南米のチョウ 3.カラフル昆虫 4.Youtubeチャンネル「Hitohaku Movie」

して収集したコレクションの寄贈によって成り立っています。特に、江田茂さんにより収集された約27万点に及ぶ「江田コレクション」は、現在では入手が困難なチョウ類やコウチュウ類が多く含まれており、キャラバン事業、企画展、常設展で、昆虫コレクション展示の主力として活躍しています。